



リエラの  
素材回収所2

---

霧聖羅  
*Seira Kiri*



RB

レジーナ文庫



炎麗

竜人族の子供。  
アスラーダに  
よく懐いている。

セリス

アスタールの従妹。  
リエラにとっては  
憧れのお姉さん。

ルナ

セリスの妹。  
明るく元気な性格で  
リエラと仲良し。

レイ

セリスの弟。  
女性に優しく  
よくモテる。

アストール

アスタールの妹。  
まだ赤ちゃんなので  
上手く喋れない。

アスラーダ

アスタールの兄。  
探索や護衛の  
仕事をしている。

スルト

猫耳族の少年。  
リエラの幼馴染で  
探索者になった。

リエラ

孤児院出身の少女。  
錬金術師の適性があると  
言われてアスタールの  
工房に弟子入りした。

アスタール

リエラの師匠。  
無口で無表情な  
長耳族の青年。

# 登場人物紹介

CHARACTERS

## 目次

リエラの素材回収所 2

書き下ろし番外編

アンナちゃんは迷走中

リエラの素材回収所 2

## プロローグ

リエラは、エルドランという町にある孤児院出身の十二歳。基礎学校で適性があると「言われたお仕事は、なんと錬金術師！」大金を稼げそうなお仕事に適性があると聞いて喜んだんだけど……

職業斡旋所に行ってみたら、めほしい求人が全くないとか、一体どういうこと？

スツカスカの求人票を前に、リエラは途方に暮れた。そんなリエラの前に現れたのが、長耳族のお兄さん、アスタールさんだ。アスタールさんは『グラムナード錬金術工房』の工房主で、黒髪に金色の瞳をした、国が傾くんじゃないかというほどの美人さん。

そこからはトントン拍子で弟子入り話が進み、工房がある『迷宮都市グラムナード』へとリエラは旅立つことになった。孤児院がお世話になっている商人のグレッグおじさんが、行商の馬車に同乗させてくれたのは本当に幸運だったなあ……

盗賊に襲われながらも辿り着いたグラムナードの町は、故郷とは全く雰囲気の違い

町だったから驚いたのなんの。

工房で暮らしているのはリエラ以外、みーんな、アスタールさんの親戚。そして美形ぞろいで、リエラは珍獣にでもなった気分だったよ。

アスタールさんは、ちよつと物忘れが激しいところがあるけれど、いいお師匠様……のような気がする。表情が動かない代わりに、耳がピコピコ動いて感情表現をするのは可愛いかも。

アスラーダさんは、アスタールさんの双子の兄。何故かりエラが同行させてもらった隊商に交じっていたんだけど、アレはなんでだったんだろう？ 未だ聞く機会がなくて謎なんだよね。彼はとても面倒見のいいお兄さんで、町の案内をしてくれたり、採集の仕方を教えてくれたりと、お世話になりっぱなしです。

調薬を教えてくれるのはセリスさんという、麗しのお姉様。綺麗で優しくて料理が上手で……もう、欠点が見つかりません！ 将来、ああいふ風になれたらいいなあ。

それから、工房併設の店舗で売り子をやっているルナちゃんとも仲良くなれたよ。セリスさんの妹だけど、おっとりとしたお姉さんとは対照的に快活な印象だ。

何はともあれ、リエラは温かく迎え入れられた。その上、グレッグおじさんとの個人的な取引まで認めてもらえたものだから、魔法薬作りに夢中になったんだよね。何せ、

売り上げはそのまま孤児院に寄付できるんだもの。

でも、魔法薬を作るだけじゃなく、素材の採集方法なんかも学ばなくちゃいけない。迷宮都市の由来でもある迷宮に、自分で採集をしに行くこともある。

ある日その迷宮で、孤児院時代の喧嘩友達である猫耳族ねこみみぞくのスルトと再会した。まさかそれがきっかけで後日、スルトと再び同じ屋根の下で暮らすことになるとは思わなかったよ。でも、気心の知れた相手が近くにいいものだと最近思う。

迷宮には危険な生き物もいて、初めて戦った時、リエラが血を見ると卒倒そつどうしちゃうことが分かったのには参ってしまった。でも、魔法薬作りの方は順調に上達してきているし、弱点を克服こくふくしつつ、これからも見習い生活を頑張るぞ〜！

## 育成ゲーム

グレッグおじさんとの取引を終わらせたあと、アスタールさんの執務室しつむしむを訪れる。

目的は取引内容についてのご報告。それから、前に言っていた『面白い遊び』とやらを教わるためだ。

アスタールさんが『遊び』なんて言うとは違和感があるけど、一体どんな遊びなんだろう？

「入りましたえ」

扉を開けると、アスタールさんはすぐ目の前に立っていた。声が近いとは思ったけど、まさかこんなに至近距離にいたとは……

カゴを持って水晶の前にいるけど、何をしていたんだろう？ と、リエラは興味津々だ。「取引は無事終了したかね？」

リエラに一瞬だけ視線を向けると、身振りですつもの場所に座るようにと示す。それから、改めて水晶に向き直ると何かの作業を再開した。

「はい。この間セリスさんに教えてもらったケアクリームもお試し用に使って貰ったので、次回の取引で感想を聞くのが楽しみです」

「ケアクリーム……?」

ひたすら作業に没頭していたアスタールさんが、『ケアクリーム』という言葉に反応して、やっとリエラの方を見る。

「肌荒れとかにいいらしいですよ。セリスさんは確か……キノケシヨーヒンとかつて言っていたかな?」

セリスさんはアスタールさんの従妹で、リエラに魔法薬の作り方を教えてくれている。綺麗で優しく、まるで女神様のような、リエラが尊敬してやまない女性だ。

「——ああ、なるほどあれか」

そう言いながら、アスタールさんはまたしても作業に戻る。そんなに熱心に何をやっているんだらう? と思いつつ、手元のカゴを覗き込んでみた。

「魔力石……?」

思わず呟くと、アスタールさんは頷いて魔力石を手取る。

「うむ。よく『視て』いたまえ」

アスタールさんが摘んだ魔力石を水晶に押し当てると、魔力石の姿がすうっと消え

た。次のものも、その次のものも。アスタールさんが繰り返しているのは、魔力石を消す作業みたいだ。

「!?」

もしかして、と思って『魔力視』を行う。そうすると、何が起こっているのかが『視え』た。摘んで水晶に押し当ててる直前、魔力石の周りを魔力の薄い膜が覆う。その状態の魔力石が水晶に押し当てられると、そこを起点に水晶の表面にも魔力の膜が広がって、その中に魔力石が溶けていく。

ほんの一瞬で終わってしまう、そんな早業だ。

「『視え』たようだな」

思わず息を呑むと、アスタールさんはそう口にしながらリエラに向き直る。

「魔力石『育成ゲーム』、覚えてみるかね?」

「!?」

え、今のってリエラにもできるものなの? そう思って固まっていると、アスタールさんはリエラの両手に一つずつ魔力石を持たせる。

「……あの、今のって、リエラにもやれるものなんですか?」

やっと声が出た。

その問いに、アスタールさんは当然とばかりに頷く。

「薬草に魔力を含ませる時と、要領はそう変わらない。魔力の膜で両方の石を覆ったら、石と石を触れ合わせる。やり方はそれだけだ。やってみたまえ」

石とアスタールさんを交互に何回か見たあと、言われた通り試みる。けれど、魔力の膜で覆うって——思った以上に難しい。リエラの技量だと、膜と呼ぶには随分と分厚い魔力が石を包み込む。その状態で石を触れ合わせようとしたけれど、膜が反発し合って上手くいかない。

「頑張りすぎだ」

アスタールさんの言葉に少し魔力の量を減らすと、膜そのものが消えてしまう。

もう一度。

さつきよりは薄い魔力で石を包み込めたけど、まだ多いみたい。

「んー……？　むむむむむ」

唸り声を上げながらも挑戦を続けていく。やっと成功したのは、七回目だった。魔力の膜がいい感じの厚さになった瞬間、片方の石が吸い込まれるように消える。リエラの手の中に残ったのは、さつきよりも少しだけ重くなったように感じる魔力石が一つ。

「……できた！」

パツと顔を上げると、アスタールさんに頭を撫でられた。

「では、魔力操作の練習として、今の作業を寝る前に必ず行いたまえ」

あ、これはもう一人でやっていいんだ。指導がこの一回で終わるらしいということに、ちよつと拍子抜けした気分になる。

「魔力を消耗するから無理をしないように」

育成は、計画的に？

確かに少し魔力を持っていかれている感じがしたから、気を付ける必要はありそうだ。「内包魔力が十万程度になるまで育てたらここに持ってきたまえ。目安は、直径十センチほどになる頃だ」

「……はい！　頑張ります!!」

元気良く返事をして、アスタールさんに渡されたカゴを抱きしめる。

「この中の魔力石、全部使っていいんですか？」

「うむ。好きにして構わない」

めちやくちや嬉しい！

リエラは、この遊びを早くやりたいとうずうずしながら、アスタールさんの執務室をあとにする。育てた魔力石をどうするのかについて聞いていないと気が付いたのは、カ



ゴの中の魔力石を全て一つにまとめてしまったあとのこと。

——まあ、その時になれば教えてもらえるんだから、急いで聞かなくてもいいか。そう思いつつ、ベッドの中で目を閉じた。

『育成ゲーム』を教わってから、あつという間に時間が過ぎて、もう月末。相変わらず、リエラは調薬と体力作りに明け暮れる毎日だ。

それはそれとして、最近はどうすつかり『育成ゲーム』にハマっている。なんというか、少しづつ魔力石が大きく育っていくのが楽しくって、毎日寝る前にせつせと育てちゃうんだよ。最初に渡された魔力石なんて、その日のうちになくなっちゃったからね……

毎週、最初と同じ量が支給されるけれど、それじゃあ、あんまり楽しめない。だから今は、スルトが迷宮で集めてきたのを仕入れて育てている。だけど——

困ったのが、魔力石を買うお金のことだ。このペースで魔力石を育てていくと、リエラのお給料があつという間になくなってしまふ。だから、お給料とは別に、お小遣い稼ぎをする方法が欲しいんだけど……。リエラ的には、工房に迷惑がかかる方法はダメだ。休みの日に個人的に魔法薬を売る——なんてことは、禁止手。

何かいい手はないものか、と思いい悩む日々が続いている。

それはそうと、『育成ゲーム』を始めてから、魔導具まどうぐなしでの調薬ができるようになってきたんだよ。

魔力の扱いが上手くなったように感じるから、その成果なのかもしれない。それまで感じていたモヤモヤが解消されて、より一層、調薬が楽しくなった。

そうそう、レシピも一つ増えて、『魔力回復促進剤』の調薬を始めている。

今まで作っていた魔法薬は『高速治療薬』。簡単に言うくと、怪我が早く治る魔法の傷薬だ。対して『魔力回復促進剤』は、魔力を回復するお薬で、飲むと一時間の間に最大魔力の二割程度までがじわじわと回復する。元の魔力が一万あった場合には、二千程度まで少しづつ回復していく計算だ。

ちよつと回復の仕方に癖があるから、使いだころが難しいかもしれない。でも、リエラにとつては便利で、自分用も作っている。これを使うと、魔力を使ったそばからじわじわ回復してくれるからね。休憩しなくても魔力が回復してくれるのは、すごく便利だ。そういう使い方をしていると、セリスさんにやんわりと叱られちゃうんだけど——

このお薬、甘くて美味しいからつい飲んでちゃうんだよ。スルトにこっそりそう話したら、ものすごい呆れ顔をして『孤児院のチビ達と同レベルだな』って——。ちよつとひどいと思う。

何はともあれ、色々やりがいも増えてきて、とっても嬉しい。

そんな日々を過ごす中、アスタールさんから突然のお呼び出しがかかった。

「セリスから報告があったのだが、魔導具なしでの調薬をこなせるようになったとか」  
 急な呼び出しだった上に、この質問。

リエラは嫌な予感がしながらも、正直に答える。

「あ、はい。『育成ゲーム』のおかげか、魔力の操作が上達したみたいです」

「それは良かった。では、明日からは外町出張所でレイから色々と学んでほしい」

「レイさんから、ですか？」

グラムナードは中町と外町に分かれていて、中町にある工房とは別に、外町に出張所がある。そこで店番をしているのが、セリスさんの弟であるレイさんだ。

元々、明日はセリスさんのもてで調薬を学ぶ日だった。外町出張所に行くことは——調薬はしないでいいんだろうか。

「うむ。レイは出張所の管理の他に、簡単な魔法具を作っているのだ」

魔法具っていうのは、魔力石を動力とする道具のこと。使う人の魔力を動力とする魔導具とは似て非なるものだ。

アスタールさんの話し方からすると、もう決定事項っぽい。リエラは渋々頷いた。

「……はい、頑張ります」

ぶっちゃけ嫌だなんて、言えないもんなあ……

そんなわけで、リエラは明日から早速、外町の出張所でお仕事することになった。これまでの頑張りが認められた結果だけど、セリスさんと仕事場が離れちゃうのか……

なんとというか、しょんぼりしてしまう。工房に帰ってくればすぐに会えるとはいえ、それはそれ、これはこれだ。でも、お仕事だし仕方がない。それに考えてみたら、魔法具の作り方も教わりたかったんだもの。いい機会だと思おう。

セリスさんとお話する機会が減っちゃうのは寂しいけど、作れるものが増えるのはいいことだ！

何はともあれ、今日から外町出張所でお仕事です。セリスさんが用意してくれたお弁当を持って、レイさんと一緒に出勤準備中。

「今日からリエラちゃんが工房にいないなんて……」

「セリスさん……。リエラも、セリスさんと離れるなんて……！」

セリスさんがハンカチを目元に当てて泣き真似をする。リエラはそんなセリスさんに

そつと近寄り見つめ合うと、二人でがっしりと抱擁し合う。

「あー……姉さんもリエラちゃんも、開店が間に合わなくなるからそれくらいにしておいて?」

レイさんは、それを見ながら苦笑する。

今まで彼とは、食事時に少し喋る程度のお付き合いだった。でも、今日からは一緒に外町出張所で働くのだから、信頼関係を構築できるように頑張らないとね。

レイさんはセリスさんの弟だけあって彼女と顔立ちがよく似ている。それだけでリエラは親近感を覚えるんだけど、彼も同じように感じているかは別だからね。

セリスさんは一瞬リエラから離れて、もう一度抱きしめ直してくれた。

うわ……幸せ!

セリスさんてば、優しいいい匂いがするんだもん、リエラはいつも通り、うっとりしてしまふ。

「リエラちゃん、レイに何かされそうになったら……」

そう言いながら、膝で何かを蹴り上げる動作をする。

「こうですか??」

「そうそう。上手よ、リエラちゃん」

リエラが真似すると、セリスさんは満足げに何度も頷く。それを見ているレイさんの腰が、ちよつと引けている。

「そんなこと教えて……」

諦めたような口調でため息交じりにレイさんが呟く。それとほとんど同時に、玄関からアスラーダさんが顔を覗かせた。

「レイ、荷運びをするから、今日は同乗させてくれないか?」

「了解……ほら、アスラーダ様も一緒だし……ね? 何も心配するようなことはないよ」肩を兼ねながらそう言つて、レイさんはヤギ車の荷台に座るスペースを空けに行く。

御者台に三人は座れるけど、アスラーダさんが行くつてことはスルトも一緒だ。そうなる一人分、席が足りなくなっちゃうものね。

荷物を積み直して、全員がヤギ車に乗り込むと、出発の挨拶をする。

「それじゃセリスさん、行ってきます!」

「お夕飯の前にはちゃんと帰ってくるのよ?」

セリスさんてば、随分と心配性だ。リエラのことをそれだけ大事に思ってくれているのかと思うと嬉しくもあり、こそばゆくもあるのだけど。

「レイ。移動中に出張所での仕事について軽く説明してやったらどうだ?」

「ああ、確かに。それじゃあ、少し説明させてもらってもいいかな、リエラちゃん？」  
 アスラーダさんの提案のおかげで、外町までの道中、出張所のお仕事について軽く説明してもらえらることになった。これは地味にありがたい。実のところ、レイさんが出張所でどんなお仕事をしているのかよく知らないんだよね。

「朝は、探索者がたくさん来る時間帯だね。『高速治療薬』を買っていく人が多いけど、武器に魔力を付与する目的で来る人も多いかな」

「魔力の付与……ですか？」

魔力の付与って、初めて聞くんだけど。一体どんなことをするのかと目を瞬かせていると、レイさんは説明を続ける。

「そう、魔力の付与。魔導具なしで魔法薬を作れるようになっていけば、やり方はすぐに覚えられると思うよ」

更にアスラーダさんも補足してくれた。

「狩る対象によっては、魔力をまとった武器でないと攻撃が通用しないことがある。だから、探索者にとって必要なサービスなんだ」

「へー、なるほど」

あ、スルトとハモった。どうやら、スルトもその辺のことは知らなかったみたいだ。

「この魔力の付与って使う魔力石によって持続時間が変わるから、朝一番に来てかけていく人が多いんだよ」

「朝一番にかけることで、有効に使える時間が多くなるからだな」

「そうそう。内包魔力が九十のものだとお手頃価格だから、九時間分をかけていく人が多いね」

「ああ……魔力石も内包魔力が百を超えるといきなり値上がりするしな」

どうやら魔力の付与には魔力石を使うみたいだ。もしかして、魔力石の内包魔力によって持続時間が変わるのかな？

「それよりも、魔力付加の方にはあまり依頼はないのか？」

「そうだね。付加だと施術に時間もかかるから、午前中は受け付けてないよ。依頼を受けてから付加する武器を預かって、翌日お渡ししが基本かな」

途中で話が横に逸れたせいもあってか、ここまで聞いたところで出張所に着いてしまふ。残念。もっと詳しく聞いておきたかった……

アスラーダさん達は、荷物を出張所の中に運び込むと、もう迷宮へと出発だ。ちょっと不安に感じるのは、これまでレイさんとはあまり交流がなかったせいかな。

「それじゃあ、リエラちゃん。今日は一日、よろしくね」

「はい！ 頑張ります！」

リエラは気合いを入れ直すと、レイさんと一緒に開店準備に取りかかった。

「おい、『高速治療薬』をこの瓶に十本だ！ 早くしてくれ!!」

「はい、只今！ 一万ミルに瓶代が三千ミルで合計一万三千ミルになります」

「こっちは二十本に、『治療丸』を十袋頼む」

「はい、只今！ 二万ミルに瓶代六千ミルと、四万ミルで合計六万ミルになります」

「嬢ちゃん、計算間違ってるぞ。六万六千ミルだろ」

「うひゃー！ ごめんなさい!!」

出張所の朝は、サラッと聞かされてた以上の忙しさだ。怒涛のように時間が流れ、気が付いたら十一時を過ぎていた。

人の波が引いたあと、リエラはカウンターの陰に思わずへたり込んだ。

「ひとまずお疲れ様、リエラちゃん」

ちよっと同情するような笑みを浮かべて、レイさんがリエラを労う。

「いつもこんなに人が来るんですか？」

彼が渡してくれた冷たいお茶を一口に飲んでから訊ねると、肯定の返事が返ってくる。

「それでも、探索者協会への委託を始めてから大分マシになったんだけどね。ここまで忙しいのは……多分、昨日の閉店後に町に着いた探索者が多かったんだと思うよ。普段は、お昼過ぎに来る方が多いしね。それでも、今日はリエラちゃんがいたから、魔法薬の方をお願いできて随分と助かったよ」

レイさんはそう言ってくれたものの、リエラは自分の体力不足を感じて落ち込んでしまう。午前中のお仕事は、たったの二時間ちよつと。それなのにこうしてへたり込んでいるのがその証拠だ。体力作りを今まで以上に頑張ることにして、レイさんが注いでくれたお代わりを飲み干す。

「さて。午前中の波も終わったし、なくなった属性石の在庫を補充しないとね」

「属性……？ 魔力石の一種、ですか？」

「そう、魔力石」

レイさんが取り出したのは、たくさんの魔力石が詰まった箱。中から一つ摘み出すと、リエラに見えるようにゆっくりと地の魔力を注ぎ込む。

透明なガラス玉のようだった魔力石が、地の魔力を取り込んで、茶色に染まった。

「こうやって魔力石に属性を付加したものを属性石と呼ぶこともあるんだ。属性石は武器に属性を付与するために必要だから、これも大事な商売道具っていうわけ」

そう言うって微笑むと、リエラの手にも魔力石を一つ置いてくれる。

「リエラちゃんも、もちろん、やってみるでしょ?」

いきなりやらせてもらえろとは思ってなかったからビックリしたものの、すぐに魔力石を握りしめて嬉々として頷く。

「それじゃ、僕が作れない火か水をお願い」

「はい」

魔力石を手の平にのせて、火の魔力を石にまとわせる。気分は魔力石『育成ゲーム』だ。あつちは属性を意識せずに二つの石に魔力をまとわせて、一つにする。今回は属性を意識しつつ、まとさせた魔力が染み込むようにイメージしてみた。魔力石は、リエラのまとさせた魔力を嬉しそうに取り込んで赤く染まる。

「いいね。その調子で火をあつと十九個、水を二十個頼んでいいかな?」

「分かりました。火十九個と水二十個ですね」

リエラは渡された魔力石に、喜んで魔力を付加していく。

途中で失敗したのもあつたけど、お昼になる前には頼まれた分の付加を終えられた。

失敗したのは、複数を一度にやろうとしたせいだ。二つ一緒に手にのせてやったら『育つ』ちゃつたんだよね……。別々の手にのせてやるのはちゃんとできたから、一緒

の手にのせなければいいことが分かつたんだけど。

失敗しない方法が分かつてからは、別々の手に魔力石を持って付加していった。

「うーん……。これは、困つたね」

そう言いながら苦笑するレイさんの手の中には、『育つ』ちゃつた水の魔力石。

「ごめんなさい……」

余計なことをしてしまった自覚のあるリエラは、小さくなるしかない。でも、思いついたら試したくて仕方なくなつちやつて、つい……。こらえ性がなくなつてごめんなさい。

「……まあ、仕方ないね。これは探索者協会に売つて、代わりに買うことにしよう」

レイさんはそう言うのと、膝をポンと叩いて立ち上がる。

「リエラちゃんも来る?」

「——是非!」

お誘いいただいたので、即座に返事をする。リエラがやつてしまった失敗の後始末を、レイさんだけにやらせるわけにはいかない。

レイさんが出かける準備をするのを待ちながら、リエラはちよつとドキドキだ。探索者協会の受付にはまだ行つたことがないんだよ。

さてさて、やってきました、『探索者協会 グラムナード支部』。

ここは、すごく大きな木造二階建てのログハウスだ。外町の建物は、大きさこそ様々だけれど、ほとんどがこと同じように丸太材で建てられている。リエラの住んでいたエルドランの町はレンガ造りの建物ばかりだったから、これはこれでなんだか目新しい。

中に入ってすぐの場所は小さなロビーになっていて、微かに木の匂いが漂っている。この前来た時は、ルナちゃんと二人でお茶を飲んだんだよね。

カウンターまでは入り口から五メートルくらいと、結構な奥行きがある。建物の半分以上の幅があるカウンターは、十もの窓口に仕切られていた。買い取り窓口が六つに、販売窓口と依頼受付がそれぞれ二つずつだ。

カウンターの向こうには棚がたくさん並んでいて、依頼受付の後ろにはたくさんの書類が見える。買い取り窓口の後ろには素材類、販売窓口の後ろには商品が保管されているみたい。

今は、人が来ない時間帯なのか、どの窓口にも一人ずつしか人がいなかった。レイさんが慣れた様子で向かうのは、買い取り窓口だ。

「「あら、レイさん。今日はどうなさったんですか？」」

買い取り窓口以外にも一斉に声が上がって、リエラは驚く。

レイさんは、それぞれの窓口の女の子に平等に笑顔を振りまきつつ挨拶している。

彼は、人当たりというか……愛想がすごくいい。顔立ちが整っていて物腰も柔らかいから、女の子を勘違いさせちゃいそうかも。

ある意味、アスラーダさんの対極にいるような人だね。アスラーダさんも顔立ちは整っているけど、無愛想でつっけんどんだから、少し怖がられそうな感じだし。

「ウチの魔力石の在庫に、普段使わないのがあってね。買い取りをお願いしに来たんだ」そう言って袋草に入れた魔力石を優しい手つきで置く。

袋草というのは、その辺に生えている植物の一種だ。葉っぱを二つにちぎると袋状になるから、中に小物を入れることができる。

「拝見しますね」

買い取り窓口のお姉さんは、袋草の中から透明感のある青い魔力石を取り出し、秤に似た道具に載せた。

「水の魔力石……内包魔力は二百ですね。こちらを買い取らせていただくなら一万四百五十四ミルになります」

「それじゃ、その金額分の魔力石に交換してもらってもいいかな？」



「大丈夫ですよ。魔力はいつもの九十でよろしいですか？」  
「それをお願い。余った分は十で」

カウンターに置かれた魔力石は九十が十一個に十が七個。

あれ?? 魔力石の値段って、九十が九百九十ミルで十が百ミルだったはずなのに、数がおかしくない?? 九十の魔力石が十一個だと一万八百九十ミルだから、それだけで買いい取り額をオーバーしちゃうよね？

「……で、この子が前に話していた、新人のリエラちゃん。これから、ちよこちよこ魔力石を仕入れに来ると思うからよろしくね」

リエラが魔力石の値段のことを考えている間に、何やら雑談が進んでいたらしい。自分の名前が出てきてビックリしつつも、リエラは慌ててお姉さん方に頭を下げながら挨拶をする。

「リエラです、よろしくお願いしますー！」

「リエラちゃんね、よろしく」

「よろしくねー」

「この子が来るようになるってことは、レイさんはもう来ないんですか？」

三人目のお姉さんにとっては、どうやら彼が来なくなる方が大問題らしい。リエラの



挨拶は華麗にスルーだ。

「毎日の仕入れには僕も顔は出すよ。この子には、足りなくなった時に補充をお願いする予定」

「なるほど！ それなら安心です。リエラちゃんよろしく！」

レイさんの言葉に、三人ともほっとしたように顔を見合わせる。

「それじゃあ、また来るね」

「二またのお越しをお待ちしています!!」

レイさんが挨拶をすると、お姉さん達の返事が綺麗にハモった。リエラもお姉さん方に頭を下げ、レイさんのあとを追いかける。

「詳しい説明は、お昼を食べながらにしようか」

そう言われて、口から出かかった質問を呑み込んだ。今、この場で話したくはないらしい。

お店に戻ると中から鍵をかけ、奥の休憩室でお弁当を出して二人でテーブルにつく。セリスさんが用意してくれたお弁当は、袋みたいな形をしたパンと、中に詰め込む具材の数々だ。リエラ達は、それぞれ好きな具を詰め詰めしながら食べ始める。

食べ物って、結構好みが分かれるよね。リエラはお野菜たくさんと茹でた卵の薄切り

を詰めてたつぶりのソースをかけたものだけど、レイさんのお好みは千切りにされた葉野菜と濃い味付けの薄切り肉を詰めたものらしい。

食べ始めてしばらくすると、やっとレイさんがリエラの聞きたかった話をしてくれる。

「リエラちゃんはさっき、魔力石の値段について聞きたかったんだと思うんだけど……。書くものがないと説明が面倒なんだよね」

そう言いながらメモ用紙とペンを用意すると、サラサラと何かを書き始めた。

「魔力石は、生物が死んだ時に発生するものだっていうのは知っているかな？」

「はい。天寿を全うした場合を除いて、全ての生き物が死んだ時に現れるんですよ」

「そうそう。生き物の内包魔力が、魔力石の姿になって顕現するといわれているね」

魔力石は、全ての生物から採取することができる魔力の塊だというのが定説だ。

「この魔力石、グラムナードでの主な入手先はどこでしょう？」

「……迷宮、ですよ？」

「そう、迷宮。主に探索者が迷宮から持ち帰るものが一般に流通しているんだ。迷宮で採れた魔力石は必然的に、探索者協会に持ち込まれることが多くてね。それで今は、探索者協会から一般の商店に卸されるようになってきているんだよ」

そう言いながら、手元のメモに書き出した表を見せてくれる。

内包魔力	市場価格	卸価格	買取価格	利用先
一〇	一〇〇	九〇	八〇	一般家庭
九〇	九九〇	八九一	七九二	外町出張所
一〇〇	五四四五	四九〇一	四三五六	商店等

「特に出回りやすいのは、十と百の魔力石だね。九十はウチでよく使うから一応覚えておいて」

「——なんか、百になるといきなり値段が跳ね上がるんですね」

「それだけ需要があるんだよ。魔法具に使うのが主だけど、一般家庭なら一月ひとひきで十、客商売しているところだと百はないと厳しいみたいだね。ほとんどの店では、百でも毎週交換が必要だって話だし」

「その頻度ひんどじゃ十の方が値段に安くても、確かに交換する手間がかかりますもんね」

実際、毎日のように交換するんじゃないや手間がかかって仕方ない。きつと、手間を取るかお金を取るかってことだね。

「あれ？ でも、そうしたら九十の魔力石を使った方が経済的？」

だって、百だと値段が五倍以上もするんだよ？ 手間をお金で買うにしたって、安く済ませたいよね。

「それが、どういうわけか二十〜九十の魔力石だと魔法具が動かないんだよね」

「え？ 動かないんですか??」

リエラは驚いて目を瞬またく。

「うん。理由は分からないんだけど、動かない。でもウチの工房みたいに付与や付加に使ったり、研究用に購入する人もいたりするから、それなりの値段にはなっているんだよ」  
ぶっちゃけて言うなら、十の代用品になるのは百だけだから、値段がガツンと上がったもそれを使うしかないってことらしい。

魔力石の価格の謎が解けたような気がするところで、今度はリエラがきちんと理解できているか確認させてもらおう。

「さっきは魔力石が思ったよりたくさん交換してもらえたんでビックリしたんですけど、卸価格で計算されたからなんですな」

「ご名答。ちなみに、属性石は市場価格が二割増しになるよ。その分、買い取り価格も上がるし、水や火の属性石は協会でも重宝ちようほうされる。ただ、リエラちゃんが自分で売りに行くのはお勧めすすめしないけど……」

そう言ってレイさんは、意味ありげに片目をつぶってみせた。「この件について、僕が教えられるのはここまで。さっき紹介したから、魔力石が欲しくなったら協会で仕入れるといいよ」

そこまで言うと、さっき交換してもらった魔力石から九十のものを二つだけ取り出して、残りを袋ごとリエラの手に放り込む。

「在庫が合わなくなっちゃうから、それはリエラちゃんのね」

「え?? え??」

アワアワしているリエラを尻目に、レイさんはお昼ご飯をさっさと片付け始めた。

「さて、午後は調薬を頼むよ。必要なものは工房に揃っているから、数は最低これだけで」  
薬の数が書かれたメモを置いて、彼は売り場に行ってしまう。

「あ、はい！ 分かりました!!」

魔力石をどうするかは置いて、とりあえずお仕事に戻らなきゃ。リエラも慌てて返事をする、工房に向かった。

出張所の初日は、朝の怒涛どとうのような忙しさから始まったけど、夕方には大分落ち着いた感じで終わる。時間帯によってこんなに忙しさが違うというのが不思議だ。レイさん

曰く、朝に来るのは、前日に用意ができていないのに急いで迷宮に入りたい人なんだって。逆に、きちんと用意をして明日から迷宮に入る人は夕方に来る。そういったお客さんは、変に急かすようなこともなかったから、落ち着いて接客ができたよ。

夜になって自室に戻ると、魔力石を作業台の上で転がしつつ、レイさんが書いてくれたメモを見直す。

『育成ゲーム』で百まで育てた魔力石を売れば、一つ当たり三千ミル以上の利益が出る。更に、属性を付加すれば、利益は四千ミルを超えるんだよね。

レイさんが魔力石をくれたのは、リエラが石を欲しがる理由を把握はあくしているからだと思ふ。それで、入手方法やそのための資金繰りを示唆しきさしてくれたんだらうけど……

彼が言うように、リエラが売りに行くと、入手方法が問題になりそうなんだよね。『育成ゲーム』のことは、あまり人に知られない方がいいんじゃないかと思ふし。そうなる、誰かに売りに行ってもらうしかない。

まず、『育成ゲーム』について知っていいような人。

それから、魔物を倒すだけの実力があり、実際に迷宮に行くこともある人。

その条件でリエラが思いつく相手は——アスラーダさんだけだ。

スルトの場合、『育成ゲーム』については知らないからね。それを話していいものか

どうかも怪しい。そう考えると、自分で売りに行くのと大差ないことになってしまふ。悩みつつ一人で唸<sup>うな</sup>っていたら、突然、部屋にノックの音が響いて飛び上がる。

「はい？」

この時間だとルナちゃんかな？ そう思いながら扉を開けると、目の前にいたのは思いがけない人。タイムリーなことに、アスラーダさんだった。

「俺に相談したいことがあるらしい、と聞いてきたんだが……」

「——えと、レイさんから聞いたんですか？」

「ああ」

やつぱり……。レイさんの気遣いは嬉しいけど、ちょっぴり気を回しすぎだ。

でも、せっかくお膳<sup>ぜん</sup>立てしてくれたんだから、もうそれに乗っちゃおうか？ そう聞き直つて、アスラーダさんの中に招き入れた。

「ちよつと廊下でお話しすることじゃないので……中でいいですか？」

リエラの言葉に、アスラーダさんはためらいつつも中に入ってくる。彼に椅子を勧め<sup>すす</sup>てお茶を淹<sup>い</sup>れ、『育成ゲーム』についての相談を始めた。

「ああ、そのことなら大雑把<sup>おおざっぱ</sup>にだが聞いている。それで？」

予想通り、彼もその話は聞いているらしい。

「毎週、魔力石の支給はあるんですけど——アスタールさんに言われた目標を達成したらどうなるかが気になって、自腹で買っていたら、その……」

資金難になりました。……なんんて、よく考えたらなんて恥<sup>ち</sup>ずかしいんだろう。言い淀<sup>とど</sup>むリエラに、彼は苦笑を浮かべる。

「資金難か。それで、魔力石の買い取り額の差を利用して資金集めをしたい……と」

「ぶっちゃけて言うと、そうです」

口ごもった言葉の先を言い当てられたら、頷<sup>うなづ</sup>くしかない。なんだかいたたまれない気持ちで肯定すると、彼は納得した様子で視線を上に向ける。

「なるほど。……まあ、俺経由で魔力石を売るのは構わない」

「それじゃ、お礼は魔力石を売った金額から——」

「礼金なら必要ない。資金を調達しようとしているのに、そのために余分な金をかけてどうするんだ？」

「えええ……？」

またもや言葉を先取りされた上に、拒否されてしまった。

「でも、何かしらのお礼はさせてほしいんですが……」

お金を払うのが一番手軽な方法のだけど……。それがダメだとすると、何で返すの

がいいだろう??

リエラが悩んでいると、アスラーダさんが苦笑しながらその方法を提案してくれた。

「じゃあ、売り上げを渡す時にでも、またこうして茶を飲ませてくれ。それでいい」

「なんか、割に合わなくないですか?」

「どうせ迷宮に入るたびに探索者協会へは行くんだ。なんの問題もない」

「そういうことなら……お言葉に甘えさせてもらっちゃいますよ?」

そのリエラの言葉には、額きだけが返ってきた。なんだか、利用だけさせてもらう感じでモヤモヤするよ。

「それじゃあ、これからよろしくお願いします!」

アスラーダさんにそう言って、頭を下げる。せめて飲みに来るだけの価値がある、美味いお茶を淹れられるように練習しよう。

何ともあれ、『育成ゲーム』の材料を調達する目的が立った。ただ、売ってもおかしくない量や属性を把握しておいた方がいいだろう。そう思って、念のために聞いてみる。

「週に一度なら、水属性の三百を一つ交せてもいいな」

「内包魔力三百って……あんまり出回らないんじゃないんですか?」

「水なら、比較的簡単に手に入る。ちょうど今スルトを鍛えているのが『水と森の迷宮』

だ。その主から採ったものだと思うだろう」

なるほど、納得です。

アスラーダさんから借りた本によると、『水と森の迷宮』は四つの島に分かれています、最低でも第三層まで広がっているらしい。春夏秋冬に分かれた島の、それぞれの階層に存在する主を倒すことによって、次の階層への道が開かれる。

単独行動する動物しかない第一層と違って、第二層では同じ動物でも群れで行動するようになるから、危険度が跳ね上がるんだって。

そして第三層になると、単独行動をする魔物に変わるらしい。第四層があるとしたら、さつと群れで行動する魔物が出るんじゃないかな?」

「そっか、主の魔力石ならそれくらいになるんだ……」

「スルトがもう少しマシになったら、お前も連れて行ってやる。同じ春の島でも、微妙に出てくる動物が変わるし、何より植生が変わるからな」

へえ、出てくる動物だけじゃなくて植生も変わるのか。それは、是非とも行きたい。

「楽しみにしています」

そう言って笑うと、アスラーダさんも笑顔になった。

最終的にお願いすることになったのは、無属性で内包魔力百のものを毎日三つずつ。

それから、週に一度だけ水属性で内包魔力三百のものを一つだ。アスラーダさんは週五で迷宮に入っているから、原価を差し引いても、毎週八万三千六百四十ミルの収入が入ることになる。

購入できる魔力石の量が、格段に増えるよ！

かかる資金を考えると、ちよつと眩暈めまいがするけど……。こんな無茶なお願い事も聞いてもらえるなんて、この『育成ゲーム』はよほど重要なものなんじゃないかな。

それなら、ご期待に添えるように、頑張つて育てていかないと。

明日売ってきてもらう分を作つた残りど、スルトから今日買った分。その全部を育てるために使つたから、今は内包魔力が五千五百八十かな？

計算上だと週に一万前後は育てられそうだ。目標達成の目安ができて、モチベーションも上がるね。育て終わつたら、また何かを教えてください。それ私も楽しみだ。もちろん、そればかりにかかずらつていて、お仕事をやるそかにするなんてことはできない。普段のお仕事もきちんとこなさないとね。

外町出張所に行き始めてから、早いものでもうすぐ一ヶ月になる。

仕事のペースが掴つかめてきて、魔力石への属性付加もスムーズに行おこなえるようになった。

最近では朝の属性付与のお仕事も少しずつやらせてもらっている。

属性の付与は、結構面白い。

付与したい属性と効果時間をお客さんに決めてもらつて、それに対応した魔力石を用意。その魔力石を武器の柄えの部分に当てつ、中の魔力をまとわせる。そうやってまとめた魔力は『魔力視』を使わなくても目に見えるんだよ。水の魔力ならほんのりと青っぽく、火の魔力なら赤っぽくなるから分かりやすい。

……実は最初、リエラはこの魔力をまとわせる作業が上手くできなかった。だって、付与しようと思つているのに、何故か付加になつちゃうんだよ？

これは普通の人だと逆に難しいそうなんだけど……

リエラが行おこなつたのは、魔力石に属性を付与するのと同じイメージだ。でも本来なら、その方法で武器に属性を付加することはできないらしい。

武器には基本的に、魔力との親和性しんわせいがない素材が使われている。そういう武器に行おこなえるのは付与で、一時的に魔法の力を宿やどす方法だ。

対して付加は、永続的に魔法の力を宿やどす。そのため、魔力と親和性しんわせいの高い素材を使つたものにだけ行おこなうことができるんだそう。

更に、付加を行おこなう場合には、内包魔力の多い魔力石が必要になる。そうでないと、術

者の負担が大きすぎて、下手すると命にかかわるんだって。

確かに思い返してみると、あの時に消費した魔力はちよつと危ない量だった。一万くらいは減っていた気がするよ。

ちなみに、失敗したのは不幸中の幸いと言っているのか、スルトの武器だ。『水と森の迷宮』の主に挑戦するために風属性を付与する予定だったんだけど……

リエラの失敗が原因で、主に挑戦する時以外は封印することになってしまった。永続的な効果のある武器を使っているのは、本人の技量が上がらないからだそうだ。

それを聞いた時のスルトは涙目で、リエラも胸が痛んだよ。だけど、アスラーダさんが何かを耳打ちした途端に、耳と尻尾をピン！ と立てて——絶望の表情から一転、笑顔になったんだよね。

一体何を言われたんだらう??

「そういうえばレイさん。ここって錬金術工房なのに、金物の加工はしないんですね」

「金物の加工、してみたの?」

ふと思いついて口にしたら、レイさんはからかうように問い返してくる。リエラは至極真面目に頷くと、自分の素直な気持ちを返す。

「やれることだったら、なんでもやってみたいです」

「なるほどね。金物の加工はやれないわけじゃないんだけど……。魔力の消費が激しいから、気軽にやるってわけにもいかないんだ」

「そんなに魔力を使うんですか?」

「そうだね……。例えばスルト君の使っている短剣を作るのに、千前後は使うかな。消費する魔力は、加工する素材や重量によって変わるけど……」

レイさんの説明に頷きながら、心の中でしつかりとメモを取る。この説明からすると、素材次第で必要な魔力が増えたり減ったりすることだよね?

「その上、せつかく作ったとしても、本職の鍛冶師が作ったものよりも品質が落ちることが多いんだよ」

「ええっ? 使う魔力の量を増やしたら、品質が上がったりするってことはないんですか?」

思わず素っ頓狂な声を上げると、レイさんは苦笑しながら理由を教えてください。

「品質を上げるためには、素材をきちんと理解する必要があるからね。使い物になる武器を作り出せるようになる頃には、本職の鍛冶師にもなれるんじゃないかな?」

「その時間があつたら、リエラは他のお勉強を頑張りたいです……」

咄嗟にそう返したものの、魔法薬と関係ない素材についても勉強はした方がいいだろ

うなあ……。こればかりは、自分の希望は関係ない。

だってリエラは、『錬金術師』見習いだもの。魔法薬ばかりではなく、金属に関する造詣ぞうげいも求められるよね。

そんなことを考えつつ無意識に百面相ひゃくめんそうをしていたらしい。レイさんはそれを見て、可笑しかそうにクスクスと笑っている。それに気が付いてむくると、彼は謝りながら素敵な提案を口にした。

「仕方ない。それじゃあ、休み明けにアクセサリーの加工でもやってみようか」

「是非せひ！」

なんだかんだで教えてもらえららしい。出張所に来てからは、物作りの仕事が少なかつたから、すごく楽しみで思わず顔がにやけてしまう。

早く、週明けにならないかなあ……

さてさて、やっと週明け！

午前中の忙まわしなさを乗り越えたあとは、お楽しみみの時間です。うずうずしているリエラに、レイさんが笑いをこらえながら用意してくれたのは、各種金属板と骨や皮。

これがアクセサリー作りの材料なのかな？

「せっかくだから、魔法具になるアクセサリーを作ってみようか」

そう言いながら、魔力石の詰まったケースも取り出す。

「これは、魔法を封じてある魔力石だよ」

魔法って、魔力石に封じることができるんだ！ そのことに驚いて、リエラは目を瞬またく。

「アクセサリーに、この魔力石を組み込むんですか？」

「ご名答！」

わざわざ見せてくれた理由を考えて訊ねると、ウインクと一緒に答えが返ってくる。

「魔力石は使い捨てだから、取り外しが利くようにデザインを考えて作らないといけない。そこに気を付けてね」

そう言うとレイさんは、銀板を手に取り、魔力を通して成形を始めた。先にこうやってお手本を見せてくれているのだ。リエラは『魔力視』を使いながらじっと見つめる。

銀板の必要な部分にだけ魔力を用いて切り離すと、そのまま形を変えていく。複雑な形を取りながら、最後にクルンと丸まって出来上がったのは、何かを抱えるような格好で丸くなる竜の指輪だった。

思わず拍手をすると、照れ笑いが返ってくる。



「ここに、魔法を封じた魔力石をセットするんだよ」

「それにはなんの魔法を封じてあるんですか?」

「『着火』だね。竜って、火を噴くイメージがあるから」

赤い魔力石を嵌め込むと、まるで卵を抱えているみたい。出来上がったものを見ながら訊ねたら、そう教えてくれた。

「そっか……」

言われてみると、魔法のイメージに合う形をしていた方が分かりやすいかも。でも、魔力石は付け替えもできるっていうから、そこまで考えなくてもいいのかな?」

「一番安い『着火』を封じた魔力石でも、百回は使えるからね。魔法が使えない人なんかは結構重宝するみたいだよ」

「なるほど……。確かに、火打石とかより気軽に火が点けられそうかも」

アスタールさんから最初に借りた魔法の本。最近分かったのだけど、実は、普通ならあの中の種類が使えればいい方なのだそう。魔法具なら誰でも使えるけれど、自力で魔法を使う場合は適性のある属性のものしか使えないらしい。『生活に使える魔法大全』なんて入門書っぽい題名なのに、詐欺にあつた気分だ。

「用意した素材の中だと、銀が一番魔力との親和性が高いんだよ。だから、最初はこれを使って練習してみてごらん」

レイさんはそう言いながら、今使った銀板の残りをリエラの前に置く。

今度は待ちに待った、リエラの番だ!

ウキウキしながら、銀板を両手で包んで魔力を送り込む。作るのは、レイさんがやってみせてくれたのと同じ、竜を模った指輪だ。

金属に魔力を通すというのは少し難しい。何せ、魔力石のように魔力がスムーズに流れていかないんだもの。それでも、多少なりとも流れていく魔力を少し強引に押し込むようにして、思い描いた形になるように念じる。

やっとのことで出来上がったのは、なんとも歪な輪っかだ。初めてだとはいえ、これはヒドイ!

「むむう……」

「慣れてくれば、イメージ通りのものができるようになるよ」

落ち込む姿を気の毒に思ったのか、レイさんが慰めの言葉を口にする。でも、なんとも言えない脱力感を覚えてリエラはうなだれた。

アクセサリー作りを教えてもらった日から、いつの間にか、もう二週間が経った。

あの日からお店の仕事の合間に、アクセサリー製作に勤しんでいる。実は、レイさんは動植物の加工は不得手で、金属の加工の方が得意なんだって。だから最初に銀の加工を覚えてくれたんだけど……

リエラが苦戦しているのを見て、動植物の素材を使ってみることを提案してくれた。その結果、植物素材だとビックリするぐらいにすんなりと成功したんだよ。植物の加工の方が、リエラは得意だったというこらしい。

コツをきちんと掴むまでは植物系の素材で色々作るようになった。そこでレイさんが用意してくれたのが、櫟かしの木の枝だ。アクセサリーを作るのに大きな素材は必要ないから、その辺にある端材はみとかでもいいかもしれない。

そういえば、この櫟の枝を用意してくれた時に、こんな会話があった。

『櫟かしの木は割と魔力を通しやすい素材だね——魔法使いを目指しているっていう探索者の人達が、よく大きな杖にして持っているね』

『おお、魔法の杖！』

『リエラちゃんも魔法使いなら欲しかった？』

『はい。なんか、魔法使いつて杖を持っているイメージなので……』

『魔法を使うのに杖なんて必要ないし、邪魔なだけだと思っただけ……。そっか、探

索者の人達が変わなわけじゃなかったんだね』

確かに、グラムナードの民で、大きな杖を持っている人なんて見かけない。リエラは、改めてイメージと現実の違いを感じたよ。

ところで、植物素材を使い始めてからの出来栄できばえは、意外と悪くない。

『植物系の素材だと、随分ずいぶんと細かい細工さいくも大丈夫みたいだね』

レイさんはリエラの手元を覗き込みながら、ゆったりとした微笑びしょうを浮かべる。

今作っていたのは、三つの指輪が交差して三連になった形のもの。このタイプの指輪には本来、石を嵌める場所はない。でも今回は、真ん中に無理やり嵌める場所を作ってみました！

そもそも普通に加工したんじゃ、木をこんな形にはできない。でも、魔力を使うと素材を問わず、粘土ねんどみたいに自由に変形させられるんだよ。だからこそ、こんな形も可能になる。同じ木でも色味が違う部分を使ったおかげで、色合いの異なるリングが絡み合っていて、思っていた以上に綺麗にできた。

『今度は、透かし彫り風のもやってみようか』

そう言っってレイさんは、見本になりそうな指輪をリエラの前に優しい手つきで置く。

五枚の花弁を持つ花と蔓を模った繊細な作りで、なかなか手の込んだ作品だ。二輪の